

槐

かい

岡井省二創刊

平成26年8月号

平成二十六年八月一日発行 第二十四巻第八号 通巻第七八号 (毎月一回) 日発行
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



遺伝子

高橋将夫

天災も戦火も知らぬ蟻地獄
免震の極意は蜘蛛の囿にありぬ
退屈も幸せのうち原爆忌
熟考の間も動く団扇の手



「俳句あるふあ」 六・七月号より七句

人生と夏山の道よく曲がる
美田にも荒地にも喜雨きたるなり
吾が動いて砂日傘動かざる
髪洗ふ女心を夫知らず
香水を嫌がつてゐる仁王かな
草笛の最後は草にもどしけり
魂は遺伝子持たず冷奴



槐安集

水野恒彦

生かされて生きる力の夏怒濤
風鈴や夢と現を往き来して
何思へとや湧きのぼる雲の峰
修司忌の泉を飲めば草匂ふ
向日葵の千の狂気にたちくらむ

加藤みき

白靴をあくまで白く男かな
衣紋抜くさまに竹皮脱ぎにけり
こゑ立てず動かぬ墓の大きかり
半裂の目鼻を探す面相筆
落し文天保山は目標ぞ



中島陽華

花篝吉弥むすびの伊達姿
消しゴムや月下美人に夜が来る
ひよいひよいと哲学の道春らんまん
塗師の文かいわいにあるさくらかな
鈴の屋は休館日にて柳絮飛ぶ

竹内悦子

水馬現れて川幅狭くなり
葉ざくらや捨てられてある魔法瓶
空揚げにされてしまひし鬼おこぜ
薬袋提げゆく茅花流しかな
さらさらと若竹にこゑ生まれけり

雨村敏子

美術館へ椿の空のありにけり
円柱とドーナツの影日の盛り
夏潮の沖船上のクレーン車
山藤の空に溶けゆく擢の音
夜の雨水茄子の苗五六寸

本多俊子

葛ざくら風の青さの中にゐて
柿若葉重なりて尚透きとほる
花菖蒲己をただすごと立てり
一本の棒に影ある聖五月
水音に憶ふことあり業平忌

近藤喜子

いつのまにか透ける光となりし余花
麦秋や多感な頃は目を伏せし
草笛そつと青空こはさぬやう
天上より降りきたるかど花うつぎ
松蟬や命マツクスなる波動

瀬川公馨

邪魔つけないイラの鱗と好気心
ぐうたらな一日過ぎたり子どもの日
宙乗りのスーパー歌舞伎時鳥
山法師両手を振つてあらゑびす
尺蠖の空中ブランコ見てゐたり

久保東海司

三寒の足湯四温のバイキング
巢に狂ふ獲物に蜘蛛の近寄れず
蝶生れて自然と翅を拵げ舞ふ
生き方を変へる気もなし蜆汁
風風いで潮目を望む遍路道

中野京子

俱生神像の前に立ちたり山笑ふ
のるはずの電車見送るげんげ道
てふてふのたくさんとんでくる日和
赤き実をしまふトマトの苗を植う
うしなふもふゆるもありて夏や立つ

柳川 晋

アオザイをすらりと着たる春日傘
太陽の涙の色のゴーヤかな
亀 麒 麟 龍 鳳 凰 の 更 衣
舟虫のみな先頭を狙ひをり
陽光を濾過して注ぐ若葉かな

岩下芳子

葛城の山の昂り躑躅燃ゆ
鉄線花大粒の雨弾きけり
高野切の余白涼しき流れあり
一杯飲みに来ませ浴衣のチンドン屋
今風に言へばイケメン業平忌

近藤紀子

さし交はす櫛の緑顔に映ゆ
腿高く茅花が原を行きにけり
水晶体の奥爛漫の春のあり
芹きざむ歓喜の無眼耳鼻舌身意
木下闇に胎蔵界へ続く道

岩月優美子

人の棲む惑星ひとつ麦の秋
幽かなる風の筋あり薪能
讚美歌の声透き通る風五月
浜屋顔無心の刻をいとほしむ
羽抜鳥今更焦ることもなし

竹中一花

真清水や體くまぐま透きとほる
撒き幣や馬駆け抜ける木下闇
夜色に変はる噴水歌ひだす
藤棚の中を口笛進みゆく
芥子の野の地蔵に帽子作りをる



槐市集

有松洋子

初夏や片目はつねに未来を見
初夏の風に総身を洗はれて
熱源の我もてあます夏の風邪
白牡丹われ一人へ咲き揃ふ
白孔雀五月の風へ羽ひろげ

犬塚芳子

湧く雲に富士抱かるる更衣
船の旅飛ばされさうな夏帽子
この松に羽衣ほしや青葉潮
青岬おのがものとし鶯の舞ふ
なぎさ打つ波ひたひたと遠青嶺

犬塚李里子

義経忌 青葉ゆさぶる 醵
まつすぐに茅の輪をくぐる川の風
雨の日の暗き明るさ鉄線花
浜豌豆光る波頭と青年と
母の忌や松原遠く青葉潮

井上静子

風呂敷は魔法のつつみ七変化
鯉幟の年紀を経たる目玉かな
菖蒲湯や針灸院の角曲る
登り来て滝拝みたる媼かな
帰り道小雨に遇ひし薯の花



今井充子

卓の上の威張つてゐたる夏蜜柑
麦秋や変らぬ笑みの伎芸天
春暁や箒持つ手のしあはせよ
山吹の咲きてありどのはつきりと
石斛のたをやかなれど香高し

江島照美

花冷や遊具の音もせぬ広場
胸躍る祭は皆を結びつく
風薫る歩ける今を感じけり
ひつそりと花大根は実を結ぶ
いびきかく犬もゐてをり目借時

岡田桃子

一向衆の仰ぐ薄暑の石川門
牡丹の帯や搦手殺気満つ
絵日傘の時々消える海鼠壁
青水輪水の生まれる音ありて
筒鳥のほほほ父母恋しけり

熊川暁子

初蝶のあとも次次あたらしく
ロビンフッドの矢文をもらふ三光鳥
缶ビール丸ごといのちいつばいに
捨てきれぬものに埋れて曝書かな
大声のなき家となり揚げひばり

後藤マツエ

雨の日は雨の眩しさ柿若葉
葱坊主捨てられしまま天に伸ぶ
筍や子らの目いつも外に向く
北国へ憑かれた如く鳥帰る
草原の馬のたてがみ風光る

阪倉孝子

更衣迷ふ楽しさ遊びをり
観世音藤房見仰ぐ喉佛
白牡丹くづる風はやはらかき
省略の多き日々なり青野行く
未来図は有耶無耶となり青山河

銀河往来 高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

指先の重き滴り甘茶仏 江島 照美

右手で天、左手で地をさす誕生釈迦仏。甘茶をかけると、その指先から雫が滴る。作者は滴る甘露から、「天上天下唯我独尊」の釈迦が一身に背負うもろもろの重みを感じ取っているのだ。

〈鯉幟登竜門を競ひけり〉の句、たくさんの鯉が登竜門を指して競っている。大川に渡した綱にたくさんの鯉が一行に並んではためく景が目につかぬ。端午の節句にふさわしい一句。〈遠蛙妻恋ひ歌の不協和音〉の句、遠蛙の鳴き声は妻恋ひ歌だという。ロマンチックだ。ところが不協和音だともいう。なるほど、不協和音だ。この感性の重層性に打たれた。

〈徒花とならず生き抜く花大根〉の句、生き抜いた花に徒花はないのだろう。「花大根」がよく利いている。

〈鳴き童の睨み忘れて天に登る〉の句は、「童天に登る」の季語を巧みに活かしている。

以上、どの句も作者ならではの視点があり、ものごとの本質に迫っている。

太陽をぬらししてをりぬ水鉄砲 熊川 暁子

水鉄砲であちこちに水をかけている子供。太陽をめがけて発射といったところ。

〈手鏡を拭ひみどりを溢れしむ〉〈産院へ花籠入る五月かな〉の句、いずれも日常が平明に詠まれていて好感がもてる。

〈行者村火達磨となる花さつき〉の句は普通に「さつき燃ゆ」と詠むところを、「行者村が火達磨となる」と詠んだあたりがいかにも作者らしい。

薫風を煮つめし紅茶ふふみをり 有松 洋子
薫風の中で紅茶を煮しんでいる景。もし薫風を煮つめたら紅茶の色になりそうなおももしろい。

〈新緑に染めし指より詩よ生れよ〉や〈初夏や天使はつねに近くぬて〉も、いかにも作者らしい感性の一句。

失言は拾ふすべなし竹落葉 永井 博光

覆水盆に返らず。失言が竹落葉とはうまく言ったものだ。いやみのないところがいい。

〈滝行に入りし男女に区別なし〉の句、白装束で滝に打たれる姿は見た目に男女の区別がつきにくい。そもそも修行に男女の差別差はないのだ。滝行の男女を捉えたところがユニーク。〈禅寺の魚板に目覚む水芭蕉〉の句の「魚板の響きに目覚める水芭蕉」、〈亀の首伸びて夕立の気配せる〉の句の「伸びる亀の首と夕立の気配」の着眼が作者ならではのもの。

〈支へ木に魂をあづけて花万葉〉の句、「支え木」の古木を詠んだ句は数多くあるが、「魂を預ける」と詠んだ句はなからう。以上、どの句も作者ならではの着眼で、ものごとの核心が平明に読み込まれている。

緑萌え不調和やがて調和する 鈴木 初音

若葉 青葉が目立つようになり、やがて緑が大自然の中に溶け込んでゆく。不調和がやがて調和する自然のならない。

天地のやさしく鹿の子歩み初む 寺田すず江

歩み始めたばかりの小鹿をやさしく天地が育む。その作者の心ばえがめでたい。〈牡丹やなべてひと世を謳歌せり〉もまためでたい一句。

(以下略)